

令和4年度 農作物病虫害発生予察情報 発生予報 第4号（8月予報）

令和4年7月29日 秋田県病虫害防除所

【内容】 Ⅰ. 予報の要点 Ⅱ. 主要病虫害の向こう1か月の予報 Ⅲ. 発生予報と防除対策 Ⅳ. 気象予報 Ⅴ. 気象データ Ⅵ. 用語の説明	【問合せ先】 秋田県病虫害防除所 018-881-3660 秋田県農業試験場 018-881-3326 秋田県果樹試験場 0182-25-4224 かづの果樹センター 0186-25-3231 天王分場班 018-878-2251
【お知らせ】 ◇今回の予報対象期間は8月を主とします。次回の発表は令和4年8月30日の予定です。 ◇病虫害発生予察情報は秋田県病虫害防除所のウェブサイトでご覧いただけます。 https://www.pref.akita.lg.jp/bojo/ ◇短期暴露評価により使用方法が変更された農薬の情報については、秋田県のウェブサイトでご確認ください。 https://www.pref.akita.lg.jp/suiden/ ◇農薬の登録内容は随時更新されますので、防除薬剤については指導機関にご相談ください。 最新の農薬登録状況は、農林水産省ウェブサイト「農薬登録情報提供システム」でご確認ください。 https://pesticide.maff.go.jp/ ◇病虫害発生予察情報の発表をお知らせするメールマガジンはこちらのウェブサイトでご登録いただけます。 https://www.e-komachi.jp/	

I. 予報の要点

水 稲	セジロウンカ（第2世代）の発生量が多いと予想されます。要防除密度に達している場合は、防除対策情報第5号を参考に薬剤防除行ってください。 斑点米カメムシ類の発生量が多いと予想されます。7月26日発表の注意報第1号を参照し、防除対策を実施してください。
大 豆	紫斑病の発生量は平年並と予想されます。耐性菌の出現を回避するため、RACコードが同じ薬剤は連用しないでください。 害虫では、吸実性カメムシ類の発生量が多いと予想されます。高温の年に多い傾向にあるので薬剤防除に努めてください。
野 菜	病害では、きゅうりのうどんこ病が多い、ねぎ（夏どり）の黒斑病・葉枯病、きゅうりの炭疽病、トマトの灰色かび病の発生がやや多いと予想されます。発病前から予防散布に努めてください。 害虫では、ねぎ（夏どり）のアザミウマ類、トマトのアザミウマ類、えだまめの食葉性鱗翅目幼虫が多い、えだまめのダイズサヤタマバエ、野菜・花き共通のオオタバコガがやや多いと予想されます。薬剤抵抗性の出現を回避するため、RACコードが同じ薬剤は連用しないでください。
果 樹	りんごとなしでは、ナミハダニの発生が多いと予想されます。ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤につき年1回使用、かつ作用点が同一の剤は年1回までの使用としてください。

Ⅱ. 主要病害虫の向こう1か月の予報

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
水 稲	穂いもち	全県	やや早い	—	平年並
	紋枯病	全県	—	やや少ない	少ない
	セジロウンカ (第2世代幼虫)	全県	—	多い	多い
	斑点米カメムシ類(第2世代成虫) (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	全県	やや早い やや早い	多い 多い	多い 多い
大 豆	紫斑病(子実)	全県	やや早い	—	平年並
	アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	全県	やや早い やや早い	平年並 やや少ない	やや少ない 平年並
	吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	全県	—	多い	多い
	ウコンノメイガ	全県	—	やや少ない	やや少ない
	フタスジヒメハムシ	全県	—	—	平年並
	マメシンクイガ	全県	平年並	—	平年並
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	平年並	やや多い
	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	多い	多い
ねぎ (夏どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや多い	やや多い
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	やや多い	多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや少ない	平年並
ねぎ (秋冬どり)	黒斑病・葉枯病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	全県	—	平年並	やや多い
	ネギハモグリバエ	全県	—	やや少ない	平年並
きゅうり	べと病	全県	—	少ない	やや少ない
	うどんこ病	全県	—	多い	多い
	褐斑病	全県	—	平年並	平年並
	斑点細菌病	全県	—	平年並	平年並
	炭疽病	全県	—	やや多い	やや多い
	アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	全県	—	少ない	平年並
	ワタヘリクロノメイガ	全県	—	やや少ない	平年並
トマト	灰色かび病	全県	—	多い	やや多い
	葉かび病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	アザミウマ類 (ヒラズハナアザミウマ)	全県	—	やや多い	多い
えだまめ	食葉性鱗翅目幼虫	全県	—	多い	多い
	ダイズサヤタマバエ	全県	—	平年並	やや多い

作目名	病害虫名	対象地域	発生時期 感染時期	発生量・感染量	
				現況	予報
野菜・花き 共通	オオタバコガ	全県	—	平年並	やや多い
りんご	斑点落葉病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	黒星病	全県	—	やや少ない	やや少ない
	炭疽病	全県	—	平年並	平年並
	輪紋病	全県	—	—	平年並
	褐斑病	全県	—	平年並	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	全県	— —	平年並	平年並
	ナミハダニ	全県	—	やや多い	多い
	リンゴハダニ	全県	—	多い	多い
	果樹カメムシ類	全県	—	やや少ない	やや少ない
	キンモンホソガ (第3世代)	全県	平年並	やや少ない	やや少ない
なし	黒星病	県北部・県中央部	—	少ない	やや少ない
	黒斑病	県北部・県中央部	—	やや少ない	やや少ない
	輪紋病	県北部・県中央部	—	—	平年並
	シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
	ナミハダニ	県北部・県中央部	—	やや多い	多い
	果樹カメムシ類	県北部・県中央部	—	平年並	平年並
ぶどう	べと病	県南部	—	平年並	平年並
	灰色かび病	県南部	—	やや少ない	やや少ない
	晩腐病	県南部	やや早い	平年並	平年並
	チャノキイロアザミウマ	県南部	—	平年並	平年並

Ⅲ. 発生予報と防除対策

A 水稻

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 穂いもち	やや早い（－）	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並、日照時間はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、作況ニュース第6号によると、出穂期は平年並からやや早いと予想されている（－/ ）。

ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における葉いもちの発病株率は0.3%（平年3.4%）、発病地点率は5.0%（平年17.6%）でいずれもやや低かった。上位2葉の葉いもち発病株率は0.04%（平年0.16%）、発病地点率は1.3%（平年2.7%）でいずれもやや低かった（ /－）。

エ、BLASTAM法による感染好適判定（県内24アメダス地点）では、7月5半旬に感染好適な日が全県的に出現している（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ほ場を巡回し、いもち病の発病状況に応じて防除対策を講じる。

イ、ほ場によって出穂期が異なることから、出穂状況を確認して茎葉散布を行う。

ウ、葉いもちの発生が認められるほ場では、出穂15～7日前にコラトップ剤、ゴウケツ粒剤／サンブラス粒剤のいずれかを散布するか、出穂直前にトライフロアブルかビーム剤と穂揃期にトライフロアブルかラブサイド剤で茎葉散布を行う。

エ、葉いもちが多発しているほ場では、上記に加え必要に応じて傾穂期にもラブサイド剤による追加防除を行う。

オ、育苗施設内外の衛生管理を徹底し、適正な育苗期いもち防除及び葉いもち防除を広域的に実施し、葉いもちの発生が認められない場合は穂いもち防除の必要はない。ただし、葉いもちが多発しているほ場が隣接している場合は、出穂期～7日後に予防剤（トライフロアブルかラブサイド剤）の茎葉散布を行う。

カ、本田での総使用回数は、テブフロキン剤（トライ剤）は2回、フサライド剤（ラブサイド剤、ブラシン剤等）及びトリシクラゾール剤（ビーム剤、ノンブラス剤等）はそれぞれ3回以内であるので注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 紋枯病	－	少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月25日に各地域振興局が行った水稻定点調査によると、あきたこまちの茎数は425本/m²（平年比85%）で少なかった（ /－）。

ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における発病株率は0.6%（平年1.6%）、発病地点率は7.5%（平年13.6%）でいずれもやや低かった（ /－）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、穂ばらみ期の発生状況を確認し、発病株率が15%を超える場合は、出穂直前～穂揃期にバシタック剤、バリダシン剤、モンカット剤、モンセレン剤のいずれかを株元に到達するように茎葉散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. セジロウンカ (第2世代)	—	多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている(/+)。

イ、7月4～5半旬の抽出ほ場(80地点)における本田のすくい取り調査の成幼虫数は23.7頭(平年0.9頭)で多く、発生地点率は87.5%(平年19.7%)で高かった(/+)。

ウ、7月4～5半旬の抽出ほ場(20地点)の払い落とし調査(粘着板法四株叩き式)における10株当たり幼虫数は32.6頭(平年3.6頭)で多かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、有効積算温度計算シミュレーションによると、第2世代幼虫の発生時期は8月上旬と予想されている。

イ、第2世代の要防除密度の目安は、見取り調査で1株に中老齢幼虫が25頭以上(粘着板法四株叩き式では幼虫が50頭以上)である。

ウ、要防除密度に達しているほ場は、防除対策情報第5号を参考に薬剤防除する。

エ、出穂期10日後頃まで要防除密度に達しない場合は、斑点米カメムシ類と同時防除する。ただし、キラップ剤はセジロウンカ、ヒメトビウンカに効果が劣るため薬剤選択に注意する。

オ、今後、さらに発生量が増加する可能性があるため、ほ場を観察し今後の予察情報に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 斑点米カメムシ類 (アカスジカスミカメ) (アカヒゲホソミドリカスミカメ) (第2世代成虫)	やや早い(前年並) やや早い(前年よりやや遅い)	多い(前年並) 多い(前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(-/+)。

イ、7月4～5半旬の抽出ほ場調査における畦畔でのアカスジカスミカメ(以下、アカスジ)のすくい取り数は5.7頭(平年2.1頭)で多く、発生地点率は17.5%(平年18.7%)で平年並だった(/+)。アカヒゲホソミドリカスミカメ(以下、アカヒゲ)のすくい取り数は4.2頭(平年2.0頭)で多く、発生地点率は37.5%(平年27.7%)で高かった(/+)。

水田内でのアカスジのすくい取り数は0.4頭(平年0.4頭)で平年並、発生地点率は11.3%(平年8.8%)でやや高かった(/+)。アカヒゲのすくい取り頭数は0.8頭(平年0.2頭)で多く、発生地点率は21.3%(平年9.1%)で高かった(/+)。

ウ、各予察灯(県内6地点)における7月1～4半旬の総誘殺数はアカスジが64.2頭(平年23.0頭)、アカヒゲが289.3頭(平年89.9頭)でいずれも多かった(/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、7月26日発表の注意報第1号を参照して防除する。

5. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ニカメイガ (2回発生地帯の 第2世代)	—	やや多い	やや多い	7月4～5半旬の抽出ほ場調査における食害株率は0.10% (平年0.05%) でやや高かった。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
コブノメイガ	—	やや多い	やや多い	7月4～5半旬の抽出ほ場調査における食害株率は0.15% (平年0.06%) でやや高かった。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
トビイロウンカ	—	平年並	平年並	7月4半旬まで飛来は確認されていない。また、7月4～5半旬の抽出ほ場調査でも発生は確認されなかった。
ヒメトビウンカ	—	平年並	平年並	7月4～5半旬の抽出ほ場調査におけるすくい取り数は平年並であった。斑点米カメムシ類との同時防除に努める。
ツマグロヨコバイ	—	平年並	平年並	7月4～5半旬の抽出ほ場調査において発生は確認されなかった。
フタオビコヤガ (第3世代)	—	やや少ない	やや少ない	7月4～5半旬の抽出ほ場調査における食害株率は0% (平年12.0%) でやや低かった。防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。
アワヨトウ	—	—	平年並	防除を必要とするほ場は少ないと見込まれる。

B 大豆

病害虫名	予報内容	
	感染時期	感染量
1. 紫斑病 (子実)	やや早い (—)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (—/±)。

イ、大豆の生育が早まっている (農業試験場 作況調査試験より) ため、開花期が早まると予想される (—/)。

ウ、前年収穫期の被害粒率は平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、開花期20～30日後にニマイバー水和剤 (RACコード: 10・1)、ベルコート水和剤 (RACコード: M7)、ベルコートフロアブル (RACコード: M7)、プランダム乳剤25 (RACコード: 3)、Zボルドー (RACコード: M1)、Zボルドー粉剤DL (RACコード: M1) のいずれかで防除する。ただし、着莢期に降雨が多い場合は、1回目防除の約10日後に追加防除を行う。

イ、耐性菌の出現を回避するため、同一のRACコードの薬剤は連用しない。

ウ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期 (発 生 盛 期)	発 生 量
2. アブラムシ類 (ジャガイモヒゲナガアブラムシ) (ダイズアブラムシ)	やや早い (-) やや早い (-)	やや少ない (前年並) 平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (ジャガイモヒゲナガアブラムシ (/-)、ダイズアブラムシ (/+))。

イ、大豆の生育が早まっている (農業試験場 作況調査試験より) (-/)。

ウ、秋田市予察ほにおける7月4半旬の発生株率はジャガイモヒゲナガアブラムシ0% (平年0.6%) で平年並 (/±)、ダイズアブラムシ0% (平年1.9%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発生が多く見られる場合は、アグロスリン乳剤などで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 吸実性カメムシ類 (ホソヘリカメムシ)	-	多い (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。

イ、前年の収穫期の被害粒率から越冬量は多いと推定される (/+)。

ウ、秋田市予察ほのフェロモントラップにおける7月5半旬までの総誘殺数は22頭 (平年8.6頭) で多い (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、アグロスリン乳剤又はパーマチオン水和剤でマメシクイガとの同時防除に努める。

イ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. ウコンノメイガ	-	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、7月4～5半旬の巡回調査における叩き出し成虫数は0.6頭 (平年0.8頭) で平年並、茎当たり卵塊数は0.01個 (平年0.06個)、葉巻発生株率は3.5% (平年7.9%)、葉巻発生地点率は37.5% (平年52.1%) でいずれもやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害は生育が旺盛なほ場で多い傾向にあるので、よくほ場を観察する。

イ、7月6半旬にはほ場全体で40～60茎の葉巻数を調査して、茎当たり葉巻数が1.3個以上ある場合は、8月上旬までにカスケード乳剤、スミチオン乳剤などで防除する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. フタスジヒメハムシ	—	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/+)。
 イ、前年の収穫期の被害粒率から越冬量はやや少ないと推定される (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、アグロスリン乳剤やトレボン乳剤などでマメシクイガとの同時防除に努める。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. マメシクイガ	平年並 (前年並)	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

- ア、成虫の羽化は日長に影響されるので、発生時期の変動は小さい (± /)。
 イ、前年収穫期の被害粒率から越冬量は平年並と推定される (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、連作により発生密度が高まるので、連作ほ場では次のいずれかで防除する。

- ① アグロスリン乳剤、アディオン乳剤、パーマチオン水和剤は、8月下旬～9月上旬に1回散布する。
 ② トレボン剤、プレバソフフロアブル5などは9月上旬に1～2回散布する。

- イ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ダイズサヤタマバエ	—	やや多い (-)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
 イ、7月中旬のえだまめ巡回調査における被害莢率は0% (平年0%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、開花日10日後頃にアルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤、スミチオン乳剤、トレボン乳剤などで防除する。
 イ、薬剤は莢によく付着するよう、丁寧に散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. 食葉性鱗翅目幼虫	—	多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
 イ、7月中旬のえだまめ巡回調査における発生莖率は8.1% (平年1.8%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期にエルサン乳剤、トレボン乳剤、フェニック

スフロアブルのいずれかで防除する。

イ、老齢期になると薬剤の効果が劣るので、若齢期に防除する。

C ねぎ（夏どり）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒斑病・葉枯病	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4～5半旬の巡回調査における発病株率は9.1%（平年4.6%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、適正な肥培管理を行う。

イ、両病害は病徴観察による識別が困難なため、両方に効果があるアミスター20フロアブル、ダコニール1000、テーク水和剤、パレード20フロアブルなどに展着剤を加用して散布する。なお、使用時期や総使用回数に注意する。また、アミスター20フロアブルは近接散布するとねぎを湾曲させる場合があるので、散布間隔は2週間以上確保する。

ウ、さび病などの発病や害虫による食害は、黒斑病・葉枯病の発生を助長するため、他の病害虫の防除を行う。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は27.2%（平年23.1%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から、アグロスリン乳剤（RACコード：3A）、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤（RACコード：4A）、グレーシア乳剤（RACコード：30）、ダントツ水溶剤（RACコード：4A）、ディアナSC（RACコード：5）、ファインセーブフロアブル（RACコード：34）、ベネビアOD（RACコード：28）等を茎葉散布、又はダントツ粒剤（RACコード：4A）、プリロツ粒剤（RACコード：28）、ミネクトデュオ粒剤（RACコード：28・4A）を株元散布する。

イ、薬剤感受性の低下を回避するため、RACコードが同じ薬剤の連用は避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. ネギハモグリバエ	—	平年並（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は2.7%（平年12.7%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多発すると防除効果が劣るので、発生初期から防除する。アグロスリン乳剤、グレーシア乳剤、ダントツ水溶剤、ディアナSC、ファインセーブフロアブル、ベネビアOD等を茎葉散布、又はダントツ粒剤、プリロツソ粒剤、ミネクトデュオ粒剤を株元散布する。特に、多数の幼虫が集中的に加害する別系統(バイオタイプB)の発生が確認されている場合は、防除を徹底する。
- イ、薬剤感受性の低下を回避するため、RACコードが同じ薬剤の連用は避ける。

4. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
シロイチモジヨトウ	—	前年並	前年並	防除が必要な場合は少ないと見込まれる。

D ねぎ (秋冬どり)

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. 黒斑病・葉枯病	—	やや少ない(前年より少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(/±)。
- イ、7月4～5半旬の巡回調査における発病株率は0.6%(平年1.2%)でやや低かった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ねぎ(夏どり)に準じる。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. アザミウマ類 (ネギアザミウマ)	—	やや多い(前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(/+)。
- イ、7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は13.2%(平年15.6%)で平年並だった(/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ねぎ(夏どり)に準じる。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. ネギハモグリバエ	—	平年並(前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている(/+)。
- イ、7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は0%(平年10.8%)でやや低かった(/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ねぎ(夏どり)に準じる。

4. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
シロイチモジヨトウ	—	前年より多い	前年並	7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は0.3%（前年0%）で前年より高かった。防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

E きゅうり

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. ベと病	—	やや少ない（前年よりやや少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4～5半旬の巡回調査における発病株率は4.7%（平年16.4%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、草勢が弱まると発病しやすくなるので、草勢の維持に努める。

イ、発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、定期的に薬剤を散布し、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

エ、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル（RACコード：11）、ゾーベックエニベル（RACコード：49・M3）、ベトファイター顆粒水和剤（RACコード：27・40）、ホライズンドライフフロアブル（RACコード：27・11）、リドミルゴールドM3（RACコード：4・M3）等の治療効果がある薬剤を葉の両面にかかるように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

オ、RACコードが4、11、21、40、49の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用を避ける。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. うどんこ病	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月4～5半旬の巡回調査における発病株率は2.7%（平年0.5%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、トリフミン剤（RACコード：3）、パールミノ（RACコード：M10）、ポリオキシシAL水和剤（RACコード：19）、ポリベリン水和剤（RACコード：19・M7）などの治療効果のある薬剤を葉の両面にかかるように散布する。ただし、アミスター20フロアブルは薬害防止のため、浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用を避ける。

イ、RACコードが1、3、9、11、19の薬剤は、耐性菌の出現を回避するため連用を避ける。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 褐斑病	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月4～5半旬の巡回調査における発病株率は0.2% (平年1.2%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、発病後の防除は効果が劣るので、発病前からシトラノフロアブル(RACコード:M1・M5)、ジマンダイセン水和剤(RACコード:M3)、セイビアーフロアブル20(RACコード:12)、ダコニール1000(RACコード:M5)などの予防剤を中心に散布する。発病を確認した場合は、スミブレンド水和剤(RACコード:10・2)など、治療効果のある薬剤を散布する。

ウ、ベンゾイミダゾール系剤(RACコード:1)、SDHI剤(RACコード:7)、QoI剤(RACコード:11)では耐性菌が確認されているので、防除しても効果が低い場合は異なるRACコードの薬剤を選択する。また、同じRACコードの薬剤は連用しない。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. 斑点細菌病	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月4～5半旬の巡回調査における発病株率は7.5% (平年6.6%) で平年並だった (/±)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、過剰施肥をしない。また、過繁茂による通風しの不良を改善する。

イ、発病した葉、茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、銅水和剤による予防散布に努める。ただし、茎葉を硬化させるので注意する。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. 炭疽病	—	やや多い (前年より多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている (/±)。

イ、7月4～5半旬の巡回調査における発病株率は2.7% (平年1.6%) でやや高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病した葉や茎、果実は早めに除去し、ほ場外で処分する。

イ、予防散布に努めるとともに、発病を確認した場合は、アミスター20フロアブル、ゲッター水和剤(RACコード:10・1)など、治療効果のある薬剤を散布する。

ウ、薬害防止のため、アミスター20フロアブルには浸透性を高める展着剤を加用しない。また、高温時の使用は避ける。

エ、降雨が続く場合や病勢の進展が激しい場合は、薬剤の散布間隔を短くする。

オ、耐性菌の出現を回避するため同じRACコードの薬剤は連用しない。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. アブラムシ類 (ワタアブラムシ)	—	平年並 (前年より多い)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ、7月4～5半旬の巡回調査における発生株率は2.6% (平年8.9%) で低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、ほ場周辺の除草を徹底する。
- イ、定期的に薬剤を散布する。ただし、薬剤抵抗性の発達を回避するため、RACコードが同じ薬剤の連用は避ける。
- ウ、ウイルスの伝染を阻止し、その後の増殖を抑制するために発生初期の防除を徹底する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ワタヘリクロノメイガ	—	平年並 (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている (/+)。
- イ、7月4～5半旬の巡回調査における食害株率は0% (平年0.8%) でやや低かった (/-)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、初期被害を早期に確認し、若齢幼虫期にアフーム乳剤、コテツフロアブルなどで防除する。

F トマト

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 灰色かび病	—	やや多い (前年よりやや少ない)

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている (/-)。
- イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は10.2% (平年1.1%) で高かった (/+)。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。
- イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。
- ウ、発病前からゲッター水和剤 (RACコード: 1・10)、ロブラール水和剤 (RACコード: 2)、ベルコート水和剤 (RACコード: M7) などで予防散布に努める。
- エ、耐性菌の出現を回避するため、同一のRACコードの薬剤は連用しない。特にRACコードが1、2の薬剤は耐性菌が確認されているので、薬剤の選択に注意する。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 葉かび病	—	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病株率は0%（平年7.7%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、多湿時に発生しやすいので、ハウス内の換気に努める。

イ、発病部位は早めに除去し、ほ場外で処分する。

ウ、発病前からゲッター水和剤（RACコード：1・10）、ダコニール1000（RACコード：M5）、ベルコート水和剤（RACコード：M7）などで予防散布に努める。

エ、耐性菌の出現を回避するため、RACコードが1、3、7、10、11の薬剤は連用しない。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. アザミウマ類 （ヒラズハナアザミウマ）	—	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）。

イ、北秋田市防除適期決定ほにおける7月3～4半旬の青色粘着板への誘殺数は521頭（平年367頭）でやや多かった（ /+）。

ウ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、ハウス周辺の雑草地は発生源となるので除草に努める。

イ、ベストガード水溶剤（RACコード：4A）、スピノエース顆粒水和剤（RACコード：5）、マッチ乳剤（RACコード：15）などを花房に付着するように丁寧に散布する。ただし、薬剤抵抗性の発達を回避するため、同一のRACコードの薬剤は連用しない。

4. その他病虫害の発生予報と防除対策

病虫害名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
疫病	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。
アブラムシ類 （ワタアブラムシ） （モアアブラムシ）	—	平年並	平年並	防除が必要なほ場は少ないと見込まれる。

G えだまめ

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 食葉性鱗翅目幼虫	—	多い（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における発生茎率は8.1%（平年1.8%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、防除対象がツメクサガの場合は、幼虫の発生初期（若齢期）にアディオン乳剤、トレボン乳剤、フェニックスフロアブルのいずれかを散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. ダイズサヤタマバエ	—	やや多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における被害莢率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、中晩生品種では開花日10日後頃に1回、晩生品種では開花日7日後頃及び14日後頃の2回、アルバリン顆粒水溶剤/スタークル顆粒水溶剤又はアルバリン粉剤DL/スタークル粉剤DLを使用する。
- イ、中晩生品種または晩生品種でスミチオン乳剤、トレボン乳剤、ダイアジノン粒剤5を使用する場合は、開花日頃～開花日7日後頃に2回使用する。※開花日：ほ場全体で50%程度の開花が確認された日とする。
- ウ、粉剤DL、乳剤、顆粒水溶剤は莢によく付着するように散布する。粒剤を使用する場合はほ場全体に均一に散布する。

H 野菜・花き共通

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. オオタバコガ	—	やや多い（-）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高い、降水量はほぼ平年並と予報されている（ /+）
- イ、県内3か所の防除適期決定ほにおける7月1～4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は2.4頭（平年2.4頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、被害痕を発見したら、幼虫が近くに潜んでいるので、注意深く観察し、捕殺する。
- イ、初期被害を早期に発見し、若齢幼虫期に防除する。

I りんご

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 斑点落葉病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病葉率は0.9%（平年1.9%）、発病地点率は63.6%（平年73.6%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、高温・多雨の多発条件下では、ポリオキシソル水剤（RACコード：19）、ロブルール水和剤（RACコード：2）、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）のいずれかを保護殺菌剤（ダイパワー水和剤、オーソサイド水和剤80等）に加用して散布する。なお、これらの薬剤は年1回の使用とする。ただし、ポリオキシソル水剤の効力低下がみられる園地では同剤を使用しない。

ウ、QoI剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒星病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病新梢率は0.2%（平年3.0%）で低く、発病地点率は9.1%（平年16.7%）でやや低かった。発病果率は0%（平年0.2%）でやや低く、発病地点率は0%（平年9.1%）で低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉、発病果実は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

ウ、黒星病の発生園では、QoI剤（RACコード：11）の使用を中止し、保護殺菌剤（ベルコート水和剤、有機銅剤など）を10日間隔で散布する。

エ、未発生園では、QoI剤の使用が可能であるが、必ず作用機作の異なる保護殺菌剤を加用する。また、耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
3. 炭疽病	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は散布間隔を短くする。

イ、ニセアカシアは伝染源となるので、園地の近くにある木は伐採する。

ウ、被害果は見つけ次第摘み取り、適切に処分する。

エ、Q o I 剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病虫害名	予報内容	
	感染時期	感染量
4. 輪紋病	—	平年並（—）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、枝幹のいぼ病斑は削り取り、トップジンMペースト（RACコード：1）を塗布する。

イ、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

ウ、Q o I 剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
5. 褐斑病	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病新梢率0%（平年0.0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、薬剤は約2週間間隔で散布するが、降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を短くする。

イ、多発が予想される場合は、8月上旬にトップジンM水和剤（RACコード：1）又はベンレート水和剤（RACコード：1）を保護殺菌剤（ダイパワー水和剤、オーソサイド水和剤80等）に加用して散布する。なお、トップジンM水和剤、ベンレート水和剤は耐性菌の出現を回避するため、年1～2回の使用とするが、両剤の効力が低下している園地では、ユニックス顆粒水和剤47（RACコード：9）を保護殺菌剤に加用して散布する。

ウ、Q o I 剤（RACコード：11）は耐性菌の出現を回避するため、年2回以内の使用とする。

病虫害名	予報内容	
	発生時期	発生量
6. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	平年並（前年よりやや多い）

(1) 予報の根拠

ア、県内6か所の防除適期決定ほにおける6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は385頭（平年337.3頭）で平年並だった（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.0%（平年0.0%）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は速やかに摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、成虫の飛来や産卵が多い園地では直ちに防除する。

ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

エ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であることから、総使用回数

に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
7. ナミハダニ	－	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たりの発生頭数は0.3頭（平年0.4頭）で平年並、発生地点率は59.1%（平年47.7%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、1葉平均成幼虫数が3頭に達した樹が全体の10%になった頃に殺ダニ剤を散布する。

イ、コロマイト乳剤（RACコード：6）は薬害（黄変落葉）を発生させるおそれがあるので、高温時には使用しない。また、本剤とストライド顆粒水和剤又はスミチオン水和剤40との混用でも、薬害（葉の黄変、葉裏の褐変）を発生させるおそれがあるので使用しない。

ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤につき年1回使用、かつ作用点在同一の剤は年1回までの使用とする。

エ、ダニオーテフロアブル（RACコード：未）を使用する場合は、防除効果の低下を避けるため、銅剤（銅を含む製剤）を使用しない。

オ、エコマイト顆粒水和剤（RACコード：23）の適用作物はりんごとおうとうのみなので、これら以外の果樹類に薬液がかからないようにする。また、ダニゲッターフロアブルは、同一のRACコードのため注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
8. リンゴハダニ	－	多い（前年より多い）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.05頭（平年0.00頭）で多く、発生地点率は31.8%（平年5.5%）で高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、「7. ナミハダニ」の項を参照する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
9. 果樹カメムシ類 （クサギカメムシ） （チャバネアオカメムシ）	－	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.0%（平年0.1%）で低く、被害地点率は9.1%（平年18.2%）でやや低かった（ /-）。

ウ、県内6か所の防除適期決定ほにおける7月1～4半旬のチャバネアオカメムシフェロモントラップへの果樹カメムシ類の総誘殺数は32頭（平成148頭）でやや少なかった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況を良く観察する。新成虫の加害は、山間部や林地に隣接する園地が多いので特に注意する。

イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤又は合成ピレスロイド剤で防除する。

ウ、薬剤の選定にあたっては、早生品種や中生品種の収穫予定日などを十分に考慮する。

エ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であることから、総使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
10. キンモンホソガ（第3世代）	平成並（-）	やや少ない（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

ア、果樹試験場（横手市）の予察ほにおける第2世代成虫のフェロモントラップへの最盛誘殺半旬は、7月5半旬（平成7月5半旬）で平成並だった（± / ）。

イ、7月中旬の巡回調査における被害葉率は0.0%（平成0.3%）で平成並、被害地点率は13.6%（平成21.6%）でやや低かった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害葉は集めて焼却するか土中に埋める。

イ、防除適期は、県北部が8月3～4半旬、県中央部・県南部が8月2～3半旬と見込まれる。

ウ、防除はバリアード顆粒水和剤又はモスピラン顆粒水溶剤などのネオニコチノイド剤を使用する。

11. その他病害虫の発生予報と防除上注意すべき事項

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
ハマキムシ類 （リンゴコカクモンハマキ） （リンゴモンハマキ） （第2世代幼虫）	-	平成並	平成並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

J なし（日本なし）

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
1. 黒星病	-	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、7月中旬の降水量から、果実に対する感染量は平成並だったと推定される（ / ± ）。

イ、7月中旬の巡回調査における果そう葉の発病葉率は0%（平成0.13%）、発病果率は0%（平成0.24%）でいずれも低かった（ / - ）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病部位は速やかに切除し、適切に処分する。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合は、散布間隔を7日とする。

ウ、スピードスプレーヤで防除する場合は、全列を走行して丁寧に散布する。薬液のかかりにくい部分に対しては、当日中に手がけで補正散布する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
2. 黒斑病	—	やや少ない（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における新梢の発病葉率は0.85%（平年5.92%）でやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、県内で栽培されている品種では、南水、八雲で発病が多い。

イ、徒長枝は早めに剪去し、適切に処分する。

ウ、薬剤の散布は10日間隔で行う。降雨が続くと予想される場合又は発病の見られる園地では散布間隔を7日とする。

エ、多発条件下では、ポリオキシシAL水和剤（RACコード：19）を主剤に加用するか、ポリキヤプタン水和剤（RACコード：19・M4）を散布する。ただし、耐性菌の出現を回避するため、ポリオキシシ剤の使用は年間3回以内とする。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	感 染 時 期	感 染 量
3. 輪紋病	—	平年並（-）

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、伝染源であるいぼ病斑の多い枝は切除し焼却処分する。枝幹の病斑は削り取り、トップジンMペーストを塗布する（塗布は年3回以内）。

イ、薬剤の散布は10日間隔で行う。高温、多雨の場合は散布期間を短くする（7日間隔程度）。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. シンクイムシ類 (モモシンクイガ)	—	平年並（前年並）

(1) 予報の根拠

ア、7月中旬の巡回調査における被害果率は0%（平年0%）で平年並だった（ /±）。

イ、県内4か所の防除適期決定ほにおける6月1半旬～7月4半旬のフェロモントラップへの総誘殺数は、160頭（平年175頭）で平年並だった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、被害果は摘み取り、6日以上水漬けする。

イ、園地の周辺に放任園や防除不良園がある場合は、発生動向に注意して防除する。

ウ、モスピラン顆粒水溶剤は、長十郎、新高、八雲、愛甘水に対して薬害のおそれがあるので散布しない（葉裏に黒色斑）。

エ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であることから、総使用回数に注意する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
5. ナミハダニ	—	多い（前年並）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における1葉当たり発生頭数は0.02頭（平年0.02頭）で平年並、発生地点率は27.3%（平年14.5%）でやや高かった（ /+）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、徒長枝は剪去し、適切に処分する。
- イ、発生が多い園地では、ただちに殺ダニ剤を散布する。ただし、コロマイト水和剤は薬害（黄変落葉）が発生するおそれがあるので高温・乾燥時には使用しない。
- ウ、ハダニ類は薬剤抵抗性が発達しやすいので、殺ダニ剤は1薬剤1年1回使用、かつ作用点が同一の剤は年間1回使用として、効力低下を防ぐ。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
6. 果樹カメムシ類 (クサギカメムシ) (チャバネアオカメムシ)	—	平年並（前年より少ない）

(1) 予報の根拠

- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における被害果率は0.03%（平年0.05%）で平年並だった（ /±）。
- ウ、県内4か所の防除適期決定ほにおける7月1～4半月のチャバネアオカメムシフェロモントラップへのカメムシ類の総誘殺数は37頭（平年84頭）でやや少なかった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

- ア、園内への飛来時期は年次変動が大きく、飛来数は地域によって異なるので、飛来状況をよく観察する。新成虫の加害は山間部や林地に隣接する園地で多いので特に注意する。
- イ、園内への飛来が見られる場合は、ネオニコチノイド剤、合成ピレスロイド剤のいずれかで防除する。
- ウ、アルバリン顆粒水溶剤とスタークル顆粒水溶剤は同一成分の薬剤であることから、総使用回数に注意する。

7. その他病害虫の発生予報と防除対策

病害虫名	発生時期	発生量		防除上注意すべき事項
		現況	予想	
リンゴハダニ	—	平年並	平年並	ナミハダニとの同時防除に努める。
ハマキムシ類 (リンゴコカクモンハマキ) (リンゴモンハマキ) (第2世代幼虫)	—	—	平年並	防除が必要な園地は少ないと見込まれる。

K ぶどう

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
1. ベと病	—	平年並 (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における発病葉率は0%（平年0%）、発病房率は0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。

ウ、横手市予察ほ（品種：巨峰）における初発は、7月18日（平年7月23日）でやや早く、7月下旬の発病葉率は0.2%（平年4.8%）でやや低かった（ /±）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、袋かけ以降の散布薬剤は、コサイド3000（RACコード：M1）、ホライズンドライフロアブル（RACコード：27・11）、ボルドー剤（RACコード：M1）のいずれかとする。なお、使用する際は収穫前日数を十分に考慮する。

イ、ホライズンドライフロアブルの使用は、耐性菌の出現を回避するため年間1回とする。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
2. 灰色かび病	—	やや少ない (前年並)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

イ、7月中旬の巡回調査における新梢葉の発病葉率は、キャンベル・アーリーが0.1%（平年0.2%）で平年並、巨峰は0%（平年0.2%）でやや低かった。発病果房率は、キャンベル・アーリーが0%（平年0.3%）、巨峰は0%（平年0.2%）でいずれもやや低かった（ /-）。

(2) 防除上注意すべき事項

ア、発病葉や発病果房は速やかに摘み取り、焼却するなど適切に処分する。

病害虫名	予報内容	
	発生時期	発生量
3. 晩腐病	やや早い (-)	平年並 (前年よりやや多い)

(1) 予報の根拠

ア、向こう1か月の降水量はほぼ平年並と予報されている（ /±）。

- イ、ぶどうの成熟期が平年より早いと見込まれる（－/ ）。
- ウ、6月上旬の巡回調査における発病果房率はキャンベル・アーリーが0%（平年0%）、巨峰が0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。
- (2) 防除上注意すべき事項
- ア、発病した果粒は速やかに摘み取り、適切に処分する。

病 害 虫 名	予 報 内 容	
	発 生 時 期	発 生 量
4. チャノキイロアザミウマ	－	平年並（前年よりやや多い）

- (1) 予報の根拠
- ア、向こう1か月の気温は高いと予報されている（ /+）。
- イ、7月中旬の巡回調査における被害果房率はキャンベル・アーリーが0%（平年0.0%）、巨峰が0%（平年0%）でいずれも平年並だった（ /±）。
- ウ、県内2か所の防除適期決定ほにおける7月1～3半旬の黄色粘着板への総誘殺数は5頭（平年17.3頭）でやや少なかった（ /－）。
- (2) 防除上注意すべき事項
- ア、例年被害の多い園地では袋かけ後もエクシレルSE又は合成ピレスロイド剤で防除する。なお、使用する際は収穫前日数を十分に考慮する。
- イ、合成ピレスロイド剤の使用は年間1～2回にとどめる。

IV. 気象予報

令和4年7月28日仙台管区気象台発表 東北地方1か月予報（7月30日～8月29日）

(1) 予報のポイント

暖かい空気に覆われやすいため、向こう1か月の気温は高いでしょう。

(2) 向こう1か月の気温、降水量、日照時間の各階級の確率（東北日本海側）

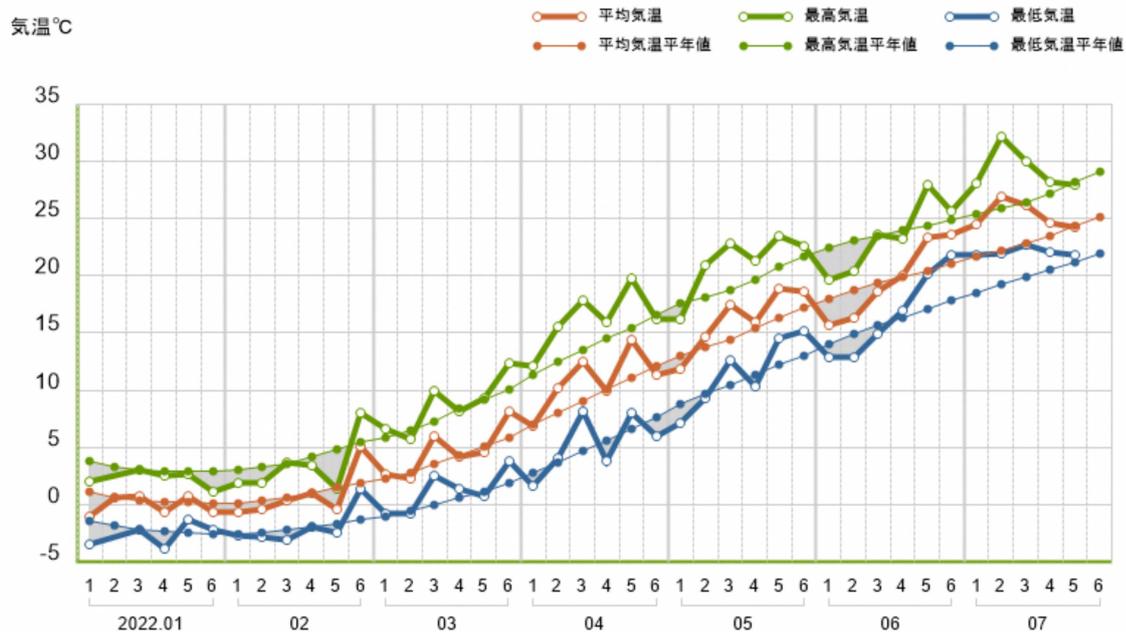
	低い（少ない）	平年並	高い（多い）
気 温	10%	20%	70%
降水量	30%	40%	30%
日照時間	30%	40%	30%

(3) 気温経過の各階級の確率（東北日本海側）

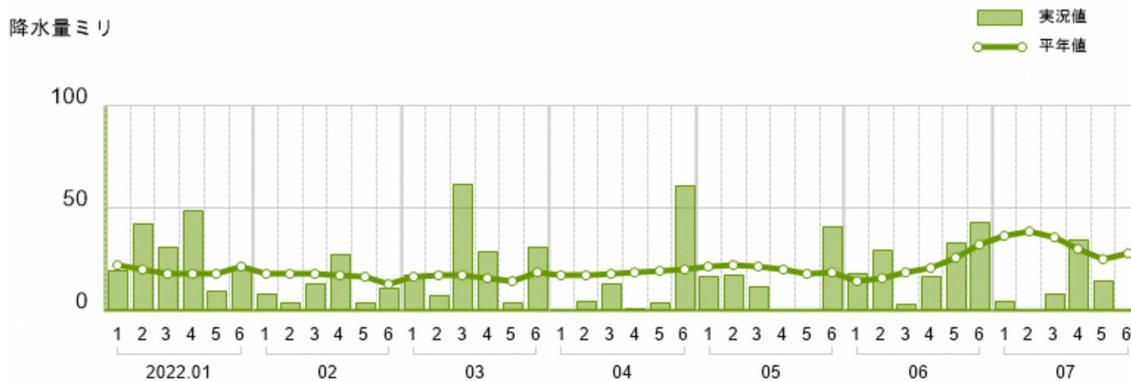
	低い	平年並	高い
7/30～8/5（1週目）	10%	10%	80%
8/6～12（2週目）	10%	30%	60%
8/13～26（3～4週目）	20%	30%	50%

V. 気象データ (秋田市、1月1半旬～7月5半旬 秋田県農業気象システムより)

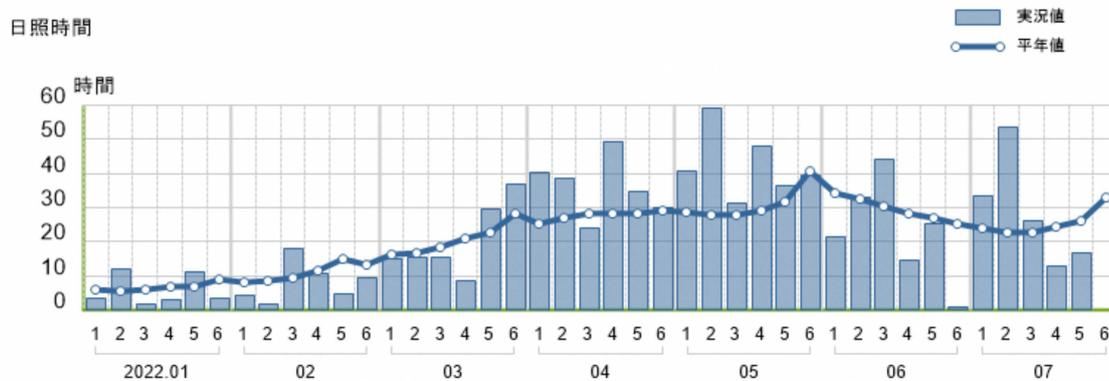
気温の推移



降水量の推移



日照時間の推移



VI. 用語の説明

発生時期

平年の発生日からの差を5段階評価で予測します。

日数	~-6	-5	-4	-3	-2	-1	平年 発生日	+1	+2	+3	+4	+5	+6~
評価	早い	やや早い		平年並				やや遅い		遅い			

発生量

発生密度の平年値からの差を5段階評価で予測します。密度のばらつきの差で示されるので、毎年発生密度が大きく変化する病害虫では、平年値からよほど大きくずれないと「多い」や「少ない」の評価にはなりません。平年値との比較なので、平年値が小さければ、「多い」になっても見かけの密度は多くないことがあります。毎年多発生している場合は「平年並」や「やや少ない」でも見かけ上は多いと感ずることがあります。

			平年値 ↓			
度数	10%	20%	20%	20%	20%	10%
評価	少ない	やや少ない	平年並		やや多い	多い

予報の根拠

予報の根拠に示している（ / ）は予察の要因で、（発生時期/発生量）を表しています。

発生時期が「遅い」場合は「+」、「早い」場合は「-」となります。発生量が「多い」場合は「+」、「少ない」場合は「-」となります。

発生時期、発生量ともに、「平年並」の場合は「±」、関係しないときは「空欄」となります。

気象の確率予報

出現が見込まれる確率予報は、高い（多い）確率が50%以上の場合は「高い（多い）」、低い（少ない）確率が50%以上の場合は「低い（少ない）」となります。低い（少ない）確率が20%で平年並と高い（多い）確率がそれぞれ40%の場合は「平年並か高い（多い）」、高い（多い）と平年並が40%で低い（少ない）が20%の場合は「平年並か低い（少ない）」となります。また、それぞれの確率が30~40%の場合は「ほぼ平年並」となります。

出現確率(低い(少ない):平年並:高い(多い))	解説
高い(多い)確率が50%以上 (20:40:40)	高い(多い) 平年並か高い(多い)
平年並の確率が50%以上 (40:30:30) (30:40:30) (30:30:40)	平年並 ほぼ平年並
(40:40:20)	平年並か低い(少ない)
低い(少ない)確率が50%以上	低い(少ない)

半旬のとり方

ここで扱われる「半旬」とは暦日半旬のことで、毎月1日から5日ごとに区切った期間となります。1半旬は1日から5日まで、2半旬は6日から10日までであり、以降6半旬まで5日ごとに該当する期間を指します。

**令和4年度秋田県農薬危害防止運動
～農薬を安全に正しく使いましょう！～**

6月1日から8月31日まで「農薬危害防止運動」の実施期間です。
農薬の安全かつ適正な使用及び管理を徹底しましょう。

農薬の適正使用・管理の徹底を！

農薬使用にあたっては、十分な注意のうえ、安全かつ適正に使用してください。

- 安全使用の基本事項
 - ・ 農薬の使用基準を遵守する。
 - ・ 病虫害の発生状況を把握し、必要最小限の農薬を使用する。
 - ・ 防除履歴を必ず記録する。
- 農薬使用上の注意
 - ・ 農薬の散布時には周辺作物に飛散（ドリフト）させないようにする。
 - ・ 家畜や蜜蜂などに影響のある農薬を使用する場合は、地域内の畜産農家及び養蜂業者と緊密に連携し、散布日時や散布地域、使用農薬の種類などを散布前に確実に周知する。
 - ・ 農薬散布後は散布器具の洗浄を徹底する。
 - ・ 特に、土壌くん蒸剤は使用上の注意事項を遵守する。
 - ・ 農薬散布作業にあたっては、装備と体調を万全にする。
- 農薬取扱い上の注意
 - ・ 農薬は保管庫に入れ、施錠して保管する。
 - ・ 農薬を他の容器（清涼飲料水の容器など）へ移し替えない。